

令和4年7月5日発行(毎月5日1次発行)
第42巻7月号(通巻76号)

風土



7

石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

面影や皮脱ぎて竹音もなし

「面影」は旗ことという俳人の面影です。旗ことは結核を患っていましたが、俳句が好きで波郷の「鶴」に学んでいました。しかし病のため会には出られず、「鶴」への投句が精一杯でした。四十二四十二ます。「生きて泣く旗こと給ふ年忘」。その「こと」の死を桂郎は「音もなし」と嘯みしめています。

母の忌の徳利に似合ふ螢草

（句集『竹取』より昭和四十二年作）
桂郎師の母は昭和三十六年七月八日に亡くなっています。以前にも述べましたが、桂郎師が理髪店をしている頃から、師の文学好きのよき理解者でした。「親父とは心ゆくまでつき合うことができたから思い残すことはないが、母は違う、悔いることばかりだ」と言っています。桂郎師は母親の忌日が夏であるにもかかわらず、秋の「露草」の別名の「螢草」を用いて、母の忌を修しています。「螢草」に母の魂を見ているのです。

神器器俳句鑑賞

南 うみを

どぜうにも仏在せり涅槃変

（句集『月虹』より平成二十三年作）
「どぜうにも仏在せり」が解りにくいですが、器師に「万緑やほとけどちやうの泡一つ」という句があり、その種の泥鰌を踏まえたものと思われまます。また「涅槃変」からは、「草木国土悉皆成仏」のあらゆるものが悉く仏になれる思想と重ねて、「どぜうにも仏」と描いたことがわかります。生きとし生きるものに対する器師の慈愛が感じられ、「命二つ」の具現化となっています。

天上の花の茶会に招かれて

（句集『月虹』より平成二十四年作）
器師は「深山蓮花」の清浄無垢な、真っ白な花から、あの色は神々に恋して得られた色なのだと確信したのです。これほど清らかな恋はないでしょう。この句も器師の言う「命二つ」の具現化で、相手（深山蓮花）に吾を全て預けた意識下の世界となっています。このような作品が器師の言う相手の命をまるまる輝かすことなのです。

法然忌

南うみを

草木の灰のぬくもり猟期果つ
荒々と鷺は巢構へ始めけり
観音の山へ木の芽の張るこゑと
田起し機泥をばばばと道過る
初ざくら映して水のあらたまる
畑人に若狭の落花きりもなし
花筏くづして畑へ水運ぶ
夕霞父が鍬打つ音いまも
蕨狩る媼や尻を高く上げ
庵主さまお留守で春子なま乾き
膨れつつ迫りつつ山笑ふなり
ぜんまいの高くほぐるる法然忌



竹間集

同人作品



春の草

小林 輝子

利休忌の句会に抓む琥珀糖
青鰻の具材を掘るに面汚す
芳ばしき青郵邸の春の草
桜濃し廃鉢山の事務所跡
杉山のあはひにぼつとぼと桜
メーデーに生まれし故かこのちなが寿
羽の国へ越ゆる峠や雪椿

逃水

田中佐知子

逃水を追うて異郷となつてをり
追ひつけずぬて逃水の楽しくて
逃水や思ひのほかを母は生き
喪の服を脱げばこぼるる桜蕊
愛奪ふ激情も無し鷹女の忌
飛花落花無人改札素通りに
集落を抜け田蛙のしきりなり

梅若忌

中村 洋子

隅田川たゆたふてをり梅若忌
梅若忌隅田も花の川となり
もう一人の自分をさがし野に遊ぶ
リラの雨風車のまはる丘にかな
風船の色の透くまでふくらます
臙夜の喩へ嘘が歩き出す
春眠の膝より落とす布カバン

目借時

橋添やよひ

公卿小路大路のむかし花の雨
平安の闇棲む邸址亀鳴けり
雨傘に張り付く花や梅若忌
春泥を来て高御座仰ぎけり
伝説の勿撞の鐘や春夕べ
大和座りの弥陀立ち上がる目借時
春眠の宙を駈けきし手足あり

緑立つ

浅田 光代

女坂ばかりが混んで御忌詣
五色幕巡らす寺や緑立つ
やすからむ八坂の桜葉となりて
吊り草の百本の揺れ目借時
銃眼のなか色鯉のみみあへる
葉ざくらの向うよりステッキの父
柿若葉色染めの布干しあがる

薬師開帳

柿沼 盟子

鉢かづく姫を思ほゆ花海棠
日だまりに生まれたてなる蝌蚪の群れ
寅年の薬師開帳花万朶
竹百幹伐りても冥き谷の春
春雷やカラーコピイの色ずれて
のどけしや供物を下げて濃き茶淹れ
藤房の風透きながら長くなり

花吹雪

高村 令子

城址の風を彩る花吹雪
花吹雪宙を掴みて嬰の一步
花ポピーお茶目盛りの反抗期
蝶々にダンス風にリズムや花菜畑
八重桜拵げて冥し義民墓所
ものぐさの何処へも行かず春炬燵
踏み石は女の歩幅夕牡丹

尾のごときもの

土井 三乙

光りある葉先の零春の雨
たんぽぽの絮吹きあたまた空つぽに
魚を焼く匂ひも春の夕べかな
過去といふ尾のごときもの夕永し
遅日かなわたくしといふなまけもの
雲が雲のかたちとなりて暮遅し
老いのねむの深さいかほど春の月

揚雲雀

林 いづみ

二輪草日陰寸土の清らなる
朝寝して鳥声に覚む快樂かな
朧夜のワインムニエル舌鯉
止まり木に揺らすヒールや世の朧
いたいけな小さき四月の揚羽蝶
揚雲雀農学校にある厩舎
あめんぼの恋の輪の重なりぬ

藤まつり

小林 共代

百千鳥富士見坂より富士はるか
人に就く天神さまの藤まつり
綿飴の膨らむ先に藤揺るる
藤の房肩に香りを残しけり
藤まつり子等の見つけし亀の池
藤まつり止めは馴染みの蕎麦すすり
白牡丹夕べは白を極めをり

つばめ来る

中根 美保

いくたびも雨に濁りて水温む
寄せ植糸の土は継ぎはぎ風光る
しばらくは胡坐のままに垣手入
後ろ向きにしばし流され春の鴨
茶の盆に布巾掛けあり種物屋
湯気洩るる洗濯工場つばめ来る
寝転べば匂ふ豊や夏隣

山河集

同人作品



南うみを選

糸杉の蒼き火を吹く朧の夜
雑踏に波音をきく朧かな
飛花落花乳母車より手が伸びて
初燕触れんと草木丈伸ばす
相聞の歌の香りの蓬餅

岡本 尚子

春眠し隣る座席のポップコーン
子雀に開けて蛤御門かな
柏槓の直立したる虚子忌かな
帽を脱ぐ指の先より花疲れ
朧夜のからくり人形迫り上がる

森田 節子

寄り目して写楽は空へいかのぼり
虎杖の花穂ではらふだんご虫
夏来る魁夷の白馬駆けだせり

小原美姜子

葉桜の下直会の酒を積み
釣り舟のたゆたふ浮巢あるらしく

根岸 善行

一村を寿ぐごとし飛花落花
走る児につく蹤くや落花のつむじ風
大空を小さく使ひ春の雷
ライラック大雪山を見霽かす
縁側にコーヒータイム春の雲

松本 胡桃

玄関の靴の乱れや花疲れ
一族の墓を守りて山桜
木曾の春バスゆつくりと曲がりけり
まが玉に宿る力や朧の夜
野遊びの足裏段々目覚めけり

風土独語／南 うみを



糸杉の蒼き火を吹く臚の夜 岡本 尚子

「糸杉の蒼き火を吹く」のフレーズは、ゴッホのうねりて燃え上がるような糸杉から発想を得たものと思われる。作者は、臚の闇の中で立ち揺らぐ糸杉を、ゴッホの絵と重ねた。「蒼き火」の措辞が巧みである。

数珠加持を頭に肩にあたたかし 森田 節子

この句は、三月二十六日の宗教行事「比良八講」を描写したものである。延暦寺の僧、修験者、信者や一般の人々が琵琶湖の近江舞子まで行き、そこで護摩を焚き、祈禱する。そして、阿闍梨が衆生に加持を行うのである。「頭に肩に」は、阿闍梨が数珠を人々に触れていく所作を描いたもので、リアルさがある。「あたたかし」は心の暖かさである。

水平に朝の広がる百千鳥 赤石 梨花

「水平に朝の広がる」とは言い得て妙である。この発想は「百千鳥」から来ている。例えば「一羽の囀りに目を覚ました時、「水平」という言葉が浮かぶだろうか。たくさんの囀り（百千鳥）に囲まれて目を覚ましたから、「水平」に朝が来るのである。良き感覚を、

良き言葉に定着させたとと言える。

夏来る魁夷の白馬駆けだせり 小原美英子

この句は絵画から、夏の到来を感じ、世界を構築した。ご存じのように東山魁夷の青の色合いの絵には白馬が登場する。じっと見るうちに白馬と初夏が重なったのである。作者はさっそく白馬を走らせた。このように絵画を素材に表現するのも方法。

横ざまに跳ねる水あり作り滝 六車 佳奈

「作り滝」は、公園や庭に設えた人工の滝である。落ちる水を見入るうちに、横へ飛ぶ雫に気が付いた。その不可思議な動きにハッとしたのである。この意外性を逃さず、言葉に定着させるのが「写生」では大事になる。

大空を小さく使ひ春の雷 根岸 善行

「春の雷」は夏の荒々しい雷に比べ、厳しさはなく一〜二回鳴って終わる。この句はその本意を「大空を小さく使ひ」と言い換えて成功した。読み手は、「春の雷が大空の片隅で、遠慮がちに鳴って終わったイメージをもち、その擬人化にニンマリとするのである。

風土集



南うみを選

比良八講法螺の一吹き高くあり 川崎 森田 節子

比良八荒湖へ治めの矢を放つ

肅々と山伏問答比良八講

白煙に巻かるる阿闍梨比良八講

数珠加持を頭に肩にあたたかし

水平に朝の広がる百千鳥 横浜 赤石 梨花

存分に落花を浴びて摩崖仏

ライラック私語も鳥語もひそかなる

花は葉に「風土」てふ道続けかし

布目ある豆腐なつかし四月尽

踏み入れて水音を聞く暮春かな 高槻 六車 佳奈

横ざまに跳ねる水あり作り滝

葉桜や石段に日のひとつづつ

まはりつつひらく番傘花は葉に

薬缶もて駆くる学僧法然忌

力抜くことを覚えて巢立鳥 松川 瀬戸 薫

内港は湖面のごとし春の昼

菜の花や声の弾けるドッグラン

たんぼぼや手話通訳の口動く

干されたる鹿尾菜は固し島の朝 子息の七色となるしやぼん玉 焼津 赤堀美恵子

久女読む闇の深さや春障子

語り部の声のどけしや杓子庵

転校を二度くり返し卒業す

風なくも風あるやうに雪柳

春の土一步一步に弾みけり 上尾 根岸 善行

春雷のささやくごとく咲くごとく

飛花落花小さな犬の胴震ひ

花散つて紆余曲折を流れけり

一献といふ千金の春の宵